

*Oliver Twist*がイギリス社会に与えたもの

—ディケンズの生涯、作品から見る階級意識—

140478 中村 さくら

序章

イギリスあるいは世界の中で最も有名な小説家の一人、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-1870) の作品の中で現在でも映画やミュージカルを通して国民に愛される作品の1つが *Oliver Twist* (1838) である。中でも主人公オリバーが救貧院で粥のおかわりを懇願する場面は当時の下層階級の人々の生活を如実に表した有名なシーンである。チャールズ・ディケンズは現在でも人気を博している小説家であり、彼の特徴として下層階級の視点を通して社会諷刺をし、下層階級の生活をよりリアルに描いている点が挙げられる。*Oliver Twist* の主人公は孤児であり、ディケンズの視点を用いて救貧院での悲惨な生活やロンドンでの少年犯罪など当時のイギリス社会の問題点がリアルに描かれている。この作品では1834年の新救貧法にディケンズがジャーナリストとして反応し、小説家としてこの社会問題を諷刺している。新救貧法は弱者を守る法であるように思われたが、むしろ改悪され下層階級の人々の生活はより苦しめられるようになった。そのような状況を浮き彫りにし批判の声を上げたのがチャールズ・ディケンズであり、*Oliver Twist* である。

作品は孤児のオリバーを主人公とし、救貧院での悲惨な生活とロンドンでのスリ集団との生活の2部構成になっている。前半では先ほど述べたように、新救貧法の諷刺を中心に子供たちの救貧院での悲惨な生活を描いている。物語後半では、オリバーはスリ集団の中で生活しながらも善と悪の中で葛藤し、最後にはオリバーの出生の秘密が明らかになり紳士の養子となり幸せに暮らすといった希望に満ち溢れた結末となっている。この作品は後に大きな反響を呼び、弱者の生活に目が向けられ、教育分野の向上でも大きな成果を挙げるようになった。ひとつの作品が社会を変える、そのような力を持つことがディケンズの大きな魅力である。

本論文において *Oliver Twist* を扱う動機は2つある。一つ目は *Oliver Twist* に関わらず他作品でもディケンズの作品は下層階級に寄り添って書かれており、作品が社会改革のきっかけとなることにディケンズの魅力があること。二つ目は、筆者が2016年の3週間に及ぶイギリスのフィールドワークにおいて、多くの地元の人々によるディケンズへの称賛の声を聞き、現在でもディケンズが国民の間で愛されている作家であると感じたことである。しかし一部の研究者の間で、ディケンズが下層階級の視点を用いて執筆した *Oliver Twist* は批判的に捉えられている。ディケンズの新救貧法を諷刺する姿勢を賛辞する一方、オリバーの出生の秘密が明らかになり中産階級の紳士の養子になるといったストーリーの偶発性や救貧院では周りの環境に対して能動的に反発していたにも関わらず後半では受動的になってしまうといった主人公の受動性が批判的に指摘されている。

そこで本論文では、ディケンズはどのような視点で *Oliver Twist* を執筆したのかを明らかにすることを主題とする。作者の生涯や作品における諷刺の方法、作品の構成を通し *Oliver Twist* を研究することで、ディケンズは下層階級の視点で描いているという一般的な解釈に加え、ディケンズの中に下層階級の視点とは違った考え方があるのではないかと、いう新たな解釈を発見することを目的とする。

第 1 章ではディケンズの生涯について述べる。ディケンズの作品を語る上で大きな要素となる下層階級の視点は幼少期の下層階級へ転落した経験から得たとされている。また彼の作品の特徴であるリアリズムとエンターテインメント性はジャーナリストと作家の両面性をもったディケンズならではのものである。第 1 章では彼の作風や思想を支えるだろうとされる生涯について論じていく。

第 2 章では、*Oliver Twist* はディケンズが下層階級の視点をもって描いた作品であると仮定し、執筆の背景や諷刺の方法、また結末について論じる。ジャーナリストとしてディケンズは 1834 年の新救貧法をどのように捉えたのか、そしてどのような主張を提示したのか、また小説家としてどのような結末を迎えるべきと判断したのかなど、*Oliver Twist* は下層階級を擁護したという解釈の下で論じる。これはディケンズの下層階級の視点はどのようなものであるかを明らかにするためである。

第 3 章では、一部の研究者の間で批判されている主人公の受動性やストーリーの偶発性について論じる。第 2 章で論じた下層階級を擁護したという解釈を否定的に捉え、また否定的に捉えられる要因とされるディケンズの中産階級的な考え方について論じる。ディケンズは下層階級の視点を持っており、本作品は下層階級の実情を中産階級に知らしめるものとされていたが、実際にはディケンズは中産階級の考え方を擁護するようなストーリー展開を描いたのではないかと考えられる。果たしてディケンズは *Oliver Twist* を下層階級に寄り添った視点で描いたのか、あるいは中産階級を擁護する考え方で描いたのか、どちらが妥当であるかを判断し、結論づける。

1 ディケンズの生涯

本章では *Oliver Twist* を描いたディケンズの生涯について述べる。*Oliver Twist* への解釈を助けるであろうディケンズの下層階級の視点が生まれた幼少期の苦悩や彼の特徴でもあるリアリズムとエンターテイメント性が磨かれた青年期、また彼が生涯長期にわたって行った慈善活動について論じていく。これはディケンズの下層階級の視点はどのようにして培われたのか、また彼はどのような存在であったかを明らかにするためである。

1-1 苦悩の幼少期

本節では彼の作品の特徴である下層階級の視点をつくった原点ともいえる幼少期に焦点を当て考察する。ディケンズは父ジョン、母エリザベスの長男、8人兄弟の第2子として1812年2月7日にイングランド南部ポーツマスで生まれた。ディケンズが生まれた家には小さな庭があり、屋根裏部屋もついており家賃年間35ポンドであったが父ジョンの年収が110ポンドであったため、楽な暮らしではなかった。父方の祖父母はどちらも家庭使用人であった。ディケンズの祖父ウィリアムは下院議員ジョン・クルーの召使から執事まで登りつめた経歴もあり、またウィリアムが亡くなった後に未亡人となった妻をジョン・クルーは女中頭として受け入れたのである。父ジョンに海軍経理局事務官の職があてがわれたのもこの両親とジョン・クルーとの縁によってである。ジョンは陽気で職場では人気者であり勤務態度も良好であったが、家計には全く興味がなく借金をこしらえるほどであった。母エリザベスは中産階級出身で教養もあり陽気で魅力的な女性であったが、経済的に苦しい状況の中では持ち前の陽気さも劣り、常に夫婦は口論をしていた。

そんな中でもディケンズ一家が比較的安定した暮らしができたのがチャタムで過ごした5年間である。1816年から1821年まで父ジョンの転勤によりケント州の海軍基地チャタムに住むことになった。メドウェイ川を見渡す丘の上に借家があり、英文学者の三ツ星聖三はチャタムの地は「ディケンズにとって、作者になってからも、心の慰めを与えてくれる懐かしい故郷であり、想像力や創造的空想力を駆り立ててくれる源泉であった」(26)と述べている。チャタムの地は何度も彼の作品の舞台となって登場し、彼の処女作である『ボズのスケッチ集』(1836)や『ピックウィック・ペーパーズ』(1836)などの初期の作品、また未完である最後の作品『エドウィン・ドルードの謎』(1870)にまで繰り返し使われている。また作家としての土台をつくったのもチャタムの地といえる。虚弱であったディケンズは家にいることが多く、そのような彼に母は読み書きを教えたのである。そして家の屋根裏部屋には父の蔵書があり『千夜一夜物語』(1706)やデフォーの『ロビンソン・クルーソー』(1719)、フィールドिंगの『トム・ジョーンズ』(1749)など種類には欠けるが質の良い文学作品を手にとっては何度も読んでいたという。彼にとってチャタムの地は決して楽ではない生活の中での「心の慰め」でありながら、まだ予期せぬ作家としての力を蓄えた「原点」であったのである。

9歳となったディケンズはチャタムの学校へ通っていたが、父にロンドンへの転勤が命じ

られ一家はキャムデンタウンのベイアム通りに引っ越す。ディケンズは学期末までチャタムにとどまっておろ、学期末をむかえ家族のもとに合流すると美しいチャタムの地から一転、そこは当時ロンドンの郊外で最も貧しい者が住む区域と表される場所であった。再度苦しい生活が始まったが、一家に明るい兆しが見えたのである。それはディケンズの姉ファニーに音楽の才能が見込まれ、王立音楽院に進学する奨学金を得たことであった。両親は姉に期待を寄せ教育を受けさせたが、ディケンズは姉の進学を素直に喜ばなかった。唯一の遊び相手であった姉が家を出てしまうことを悲しんだことはもちろんだが、それ以上に姉に教育を与えるということは、ディケンズには教育の機会が与えられないことが貧しい一家の中では示されたからである。そんなディケンズは家事の手伝い、弟や妹の世話、質屋の行き来が日常となっていた。彼にとって屈辱的な日常であるが、現在から言うならば下層階級やロンドンの街並みをリアルに映し出す彼の作家としての観察眼はこの頃から鍛錬され、特別な「日常」となったのではないかと考えられる。

しかし彼にとって最も屈辱的な出来事は1824年に起きる。借金の不払いで父ジョンは逮捕され、マーシャルシー債務者監獄に入れられたのである。この時長男ディケンズは12歳にして一家の大黒柱となり、親類の経営するウォレン靴墨工場に働きに出された。朝の8時から夜の8時まで靴墨の瓶詰めや、ラベル張りなどの作業が続き週給6シリングの薄給で働いたという。彼はもちろん喜んで働いたわけではない。体力面で厳しいこともさることながら彼は生涯忘れることのない精神的な苦痛をここで経験したのである。ジャーナリストのクリア・トマリンは「彼は当時を回顧し、境遇がもたらす悲哀感、感情の傷つきやすさを強調している。確かに当時彼は孤独で、しばしばひもじい思いをし、両親がいないのでひどく淋しかった。その悲しみは、両親が彼をその境遇に進んで置いた事実を知ったことで、いっそう深まった」(47)と述べている。しかしそれでも彼にとって両親は不可欠な存在であった。父が逮捕されまもなくディケンズ以外の家族は父と同じく監獄の中で過ごした。ディケンズにとっては教育の機会を奪い労働をさせる、恨んでも仕方のない両親であるが、彼は朝食と夕食は家族と共にしていた。それほど彼にとって孤独は大敵なのである。三カ月で父は監獄から釈放されたが彼の労働は続いた。あれほど彼は苦しんでいたにも関わらず両親はそのままディケンズの収入を家計の収入源としたため、彼はもう1年働いたのである。

児童労働から解放される契機となったのはディケンズが優秀な社員として見世物となっていたところを父が目撃したことである。そこから父がディケンズを学校にやるといい、経営者と喧嘩別れをしたことでディケンズは工場を辞めることができた。その後粗末でいい加減な授業を行う学校であったがディケンズはウェリントン・ハウス・アカデミーに入学することができた。小説家兼批評家のアンガス・ウィルソンによると、ディケンズにとって学校は「興味と仲間、勉強と遊びの天国の境地」(52)だったのである。彼にとって教育を受ける機会が与えられることはこの上ない幸せであったように思われる。

三ツ星によると児童労働をさせられた経験は「一生涯いやされることない心の深手」(35)

であり、このことは身内も知らず、ディケンズの死後友人のジョン・フォスターによって記されたディケンズの伝記により明らかになった。それほど彼の輝かしい経歴において、児童労働の経験は思い出したくない過去だったのである。この節を通して幼少期の幸福な過去と苦痛な過去を取り上げたが、どの過去においても彼は虚弱体質であったこと、労働をさせられ満足いく教育を受けることができなかったことなど、何らかのコンプレックスと対峙しているように思われる。現在から見ればその障害の存在により彼は小説家として無二の才能が開花したと考えられるわけであるが、彼の作品の主張を支えるにはあまりにも悲観的で大きすぎる背景であると考えられる。次節では、このような幼少期を経て、ディケンズがジャーナリストとして、小説家として開花する青年期について論じていく。

1-2 ジャーナリストとして、小説家として

前節のディケンズの幼少期の略歴を受け、本節では幼少期以降のジャーナリストや小説家として活躍するようになったディケンズの経歴を、主に *Oliver Twist* が執筆されるまでの期間を中心に明らかにする。さらにジャーナリズムや小説を書くことに対する姿勢を論じ、*Oliver Twist* がどのような環境下で描かれたのかについて考察する。

ディケンズは私立小学校ウェリントン・ハウス・アカデミーに入学して間もなく特待生として扱われたが、彼にとって教育が与えられた幸せな時間はわずかであった。彼が15歳の時、父ジョンの借金返済のため学業を諦め働きに出なければいけなかったのである。そのため彼が生涯で教育を受けたのは、チャタムで暮らしていた時に通った学校と合わせて合計で約4年間、小学校レベルの学習で終了したのであった。学業を終えディケンズは母の親類の縁によりエリス・アンド・ブラックモア法律事務所で事務員として週に6日働くようになった。しかし彼にとって事務員の仕事は退屈であり、「その鬱積を晴らすかのように、一日の勤めが終わると、ロンドンの夜の街を何時間もぶらついたり、仲間と一緒にコヴェント・ガーデン劇場から名もない小さな劇場に至るまで、足しげく通いつめ、シェイクスピア劇を観たり、素人演劇に興じたりした」(42)と彼の余暇の楽しみ方について三ツ星は述べている。このような余暇が彼にとって後の創作の材料になっていると多くの研究者は指摘している。

退屈な事務員をしていたディケンズの大きな転機となったのは、父ジョンの行動によるものである。ジョンは海軍経理局を辞め、速記術を身につけ義理の弟でジャーナリストのジョン・バローが議会報道の専門誌として創刊した週刊新聞 *The Mirror of Parliament* の議会記者となった。そこで父の刺激を受けたディケンズは速記術を習い始めるようになり、彼が17歳の時には法律事務所を去り、民法博士会館の教会裁判所で記者を勤めるようになった。その3年後に父や叔父が所属する *The Mirror of Parliament* の議会記者となりジャーナリストとしての人生を開始する。彼の速記は非常に正確であり議員からの称賛の声を受けていた。しかし依然として生活は良好にならず、「国会開会中は多忙を極め、週20ギニーから25ギニーの収入にもなったが、暇な時は減収となり、再び民法博士会館で速記を

取るなど、生活は少し楽になったもののまだ不安定な時期を送る」(20-21)と英文学者の植木研介は述べている。ディケンズは議会在休会の際にはより仕事を求め、やがて友人の議会記者トム・ビアドの推薦により彼が22歳の頃、*Morning Chronicle*の一般通信員に決まった。*Morning Chronicle*は改革を目指す新聞として発行され、当時の主力日刊紙である*The Times*に対抗しようという目標があり、ディケンズはそのプロジェクトの重要メンバーとして集められた。植木によると、編集長であるジョン・ブラックは「物語を書き始めたディケンズを支持し励ました」(21)とされ、*Morning Chronicle*はジャーナリストとしての開花や作家としての第一歩を踏む重要な舞台となった。

ディケンズの作品が世に出たのは、まだ彼が*The Mirror of Parliament*の議会記者であった時だった。原稿料は貰えず匿名であったが彼が書いた通りのスケッチ「ポプラ小路でのディナー」が1833年12月*Monthly Magazine*に匿名で掲載されたのである。この物語は「ロンドンと郊外の生活を鋭く切り取ったもので、小さなドラマティックなエピソードが描かれている」(71)とクレア・トマリンは解説しており、また「秩序と混乱が対比されているが、それは、彼の作品と、彼の人生を貫くテーマである」(72)と後の作品との一貫性をトマリンは指摘している。それほどに彼の観察眼や作品のテーマは初期の頃から完成形に近いものであり、21歳にして多くの経験をしている彼であるからこそ描けるものであったと考えられる。1834年1月に2番目のスケッチが掲載され、その後も執筆活動は続き、*Monthly Magazine*に同年の8月から「ボズ」というペンネームを執筆に際して使用するようになった。しかし*Monthly Magazine*が寄稿者への原稿料の支払いが不可能な状態となったため、それ以降、ディケンズは記者として携わっていた*Morning Chronicle*や姉妹紙である*Evening Chronicle*に発表の場を移している。後にいくつかのスケッチが集まり二巻本となったのが*Sketches by Boz*(1836)である。

その後、彼を小説家として確立させたのは*The Pickwick Papers*(1836)であった。事の初めは出版社チャップマン・アンド・ホールがディケンズに画家ロバート・シーマーの木版画に小文を添えることを依頼したものであった。*Morning Chronicle*でフルタイムの仕事を行っており多忙であったが、当時キャサリンとの結婚を控えており結婚資金を集めるためディケンズはこれを了承した。依頼を受けたのが1836年2月10日であり、出版は同年の3月31日ととても短い期間であったが彼はこれをこなしたのである。月刊分冊の連載で20回発行する方法を採用していたが、連載を開始して間もない4月末にシーマーは鬱病により猟銃自殺をしてしまったのである。このためその後の出版が危ぶまれたが、代役を探しディケンズは新人のハブロット・ナイト・ブラウンに挿絵を頼んだ。彼はディケンズの「ボズ」というペンネームに合わせ、「フィズ」という名で以降の作品の挿絵も担当した。出版した当初売れ行きは好調ではなかったが、主人公ピックウィックの召使であるサム・ウェラーという人物を登場させると売れ行きはますます伸び、「熱烈な歓呼を受け、(中略)40,000部以上にふくれ上がった」(53)と三ツ星は*The Pickwick Papers*の人気について述べている。こうしてディケンズは小説家としての名声を確立したのである。このときジ

ジャーナリストであるときには感じ得なかった読者との繋がりを彼は感じるようになった。トマリンは彼の読者との関わりについて「自分と大衆は個人的に繋がっているという、この感覚が、彼が作家として伸びていくうえで、最も重要な要素になった」(90)と論じている。以後論じていくディケンズの読者の期待を感じ取りながら発行していく姿勢や読者に希望を持たせる結末にするなどの行動は彼の処女作から始まる「大衆との個人的な繋がりが」が要因となることが考えられる。

このように小説家としてのディケンズが確立するきっかけとなった *The Pickwick Papers* の次に執筆したのが *Oliver Twist* である。この作品は1836年ディケンズが23歳の時、かねてから新しい作家と契約を結ぶことに熱心であった出版業者のリチャード・ベントリーと契約し、新しい雑誌 *Bentley's Miscellany* の編集長を務めること、毎月16頁寄稿することを条件に執筆された作品である。この契約の後にディケンズは *Morning Chronicle* の記者を辞めている。これ以降、編集長という重責や毎月の寄稿により以前よりも決められた時間の中でジャーナリストと作家との両立が求められたのである。

Oliver Twist も *The Pickwick Papers* と同様に月刊分冊の連載方法で1837年1月31日の第2号から発表し、当時はこの二作品が同時進行で出版されていた。*Oliver Twist* 執筆中、ディケンズはジャーナリストとして大変多忙を極めたが第一子の誕生、妻キャサリンの鬱病発症、キャサリンの妹メアリーの死、転居など私生活でも多くの出来事が起き大きな負荷がかかった。中でもメアリーの死は彼に精神的苦痛を与え、トマリンによると、ディケンズは「彼女と同じ墓に埋葬してもらいたいという望みを公言した」(101)というほどであり、仕事が手につかず執筆中の二作品の分冊は一カ月分キャンセルになった。仕事以外での出来事が重なった執筆期間であったが *Oliver Twist* を含む *Bentley's Miscellany* の売れ行きは好調であり作家、編集者として成功を遂げた。

ここでディケンズの初期のジャーナリストとして、作家としての姿勢に着目する。彼は議会報道記者としてジャーナリストへの道を歩み始めるが、議会の審議を聞く中で徐々に政治に幻滅していった。「英国議会も、彼によれば、良識と言論の府に見せかけて、実際は、支配階級や有産階級のさまざまな派閥が利権をあさる場であって、民意を尊重して、それを反映する機関ではなかったのである」(48)と三ツ星は述べている。彼の作品の中で墮落した政治家が好んで描かれ、賞賛に値する政治家が描かれないのはそのような背景から生じる結果なのである。それゆえ政治についての情も少なく的確に記事にする態度はジャーナリストとして評価すべきであり、その一方で植木は「自分の想像する世界の中に自由に没入できる彼は天性の作家だったと言える」(22)と論じている。またウィルソンは初期の作品の即興的要素について、*The Pickwick Papers* は完全に即興の産物であったのに対し、他の作品は発刊までにある程度の構想期間が設けられている。しかし *Oliver Twist* は構想期間6カ月と比較的に短く書き溜めていくことはなかったと指摘している(104)。また彼の好んだ月刊分冊の出版方法は読者の反応や批判などを意識し、考案変更を容易に行うのに便利であった。彼の作品の即興的要素や月刊分冊という連載方法はいずれもジャーナリ

ズムを意識したためだと考えられ、この点でディケンズのジャーナリストとして、小説家としての繋がりがみえる。

本節ではディケンズがジャーナリストとして、小説家として名声を得るまでを中心に論じたが、彼は生涯雑誌の編集長として務めながら執筆活動にも勤しんでいた。もちろん多忙であったがそれをこなすだけのバイタリティがうかがえ、そのような原点にはやはり幼少期の苦悩があったからではないかと考えられる。ジャーナリストや小説家という学問的な職業に就くことは、満足のいく教育を受けることができなかつた幼少期の彼の苦悩と決別することのできる喜びに繋がった。そのため彼は多忙を極めながらもジャーナリストと小説家を両立させたのである。本稿の対象作品である *Oliver Twist* は彼が編集長として、またロンドンで名の通った作家として執筆し、めまぐるしく変化する彼の人生の中でジャーナリズムの精神と鮮明な観察力を一貫して保ち描かれた作品である。*Oliver Twist* 執筆において月刊分冊という連載方法は、ジャーナリストとして、小説家として二面性を持つ中で共通する、読者との繋がりを大切にしようとした彼の意志の表れであったといえる。次節では、ジャーナリストや小説家とは違う、慈善家としてのディケンズについて論じる。

1-3 慈善活動家

前節ではディケンズがジャーナリストとして開花し、小説家として名声を得るまでを論じたが、本節ではジャーナリストや小説家以外の慈善活動家としてのディケンズについて論じる。彼がどのような活動をしていたのか、特に長期に渡って継続的に活動した娼婦更生施設を例にとり、取り組みを明らかにし、その結果どれだけの功績をあげたのかについて論じる。その後、彼の娼婦更生施設への取り組みや、娼婦更生施設に入った娼婦がどれだけ更生できたのかを通じ、彼の理想とする下層階級への社会的救済方法とは何かを考察する。これは後の *Oliver Twist* の解釈について論じる際に、ディケンズの主張は下層階級と中産階級のどちらに傾倒しているのかの妥当性を問うにあたって必要な要素となる。

ディケンズはジャーナリスト、小説家として名声を得た後も精力的に活動し、また雑誌の編集や小説の執筆と並行して多くの社会活動を行った。彼の社会活動は雑誌、小説と同様に彼の大きなテーマである下層階級の視点を取り入れ、救済の方法を模索し実践することであった。彼のジャーナリストとしての関心は幅広く、社会活動にまで影響を与え、彼は貧民学校の改善や初等教育法の成立、慈善興行としての公開朗読、娼婦更生施設の設定など様々な社会活動を行っている。

ここで活動の詳細を述べる前に、ディケンズの社会活動を多方面から支えた慈善家アンジェラ・バーデット＝クーツについて取り上げる。クーツは革新派の政治家である父とエディンバラ銀行家の一族出身の母との間に生まれた。英文学者の武井暁子は、クーツは23歳にして祖父の莫大な財産を相続し、「イングランドで最も裕福な女相続人」(184)と知られているほどであったと述べている。彼女の財産の大部分は慈善活動と寄付に費やされ、彼女の事業は、娼婦更生施設の設定や低所得者向けの共同住宅建設、国立子供虐待防止協

会、王立動物虐待防止協会など多岐にわたっていた。また彼女の活動は国内にとどまらずオーストラリアの先住民への支援やトルコ難民への援助など国外にまで幅を広げていたと武井は述べている（185）。

ディケンズと彼女の出会いは文献によって1835年から1840年と幅があり曖昧であるが、ディケンズはジャーナリストとして活動しているときに彼女と出会っていることは明らかである。その後ディケンズとクーツは様々な共同慈善事業を行っていくが、クーツは資金面でディケンズを多く支援した。彼らにとって初めての活動は、1843年クーツの依頼でディケンズがロンドンの最下層地区の一つであるサフロン・ヒルにあるフィールド・レイン貧民学校を視察したことであった。その後ディケンズは教育問題に強い興味を示し、中でも貧民学校の改善や公教育制度の制定に尽力した。

またディケンズは1858年から公開朗読もしている。これは個人的な活動であり収益が高く金銭面から公開朗読について賛否両論を生んだが、これについてクーツは異議を唱えなかったとウィルソンは論じている（243）。それには当時の庶民の娯楽と識字率が関係していると考えられる。英文学者である梅宮創造はヴィクトリア朝時代の中では他人と一緒に読書を楽しむことが一般的な庶民の娯楽であり家族団欒の時間に朗読を行ったり、酒場では新聞を朗読する雇われた読み手もいたほど庶民の娯楽にとって朗読はつきものであったと論じている（3-4）。19世紀イギリスの識字率は1851年に男性70パーセント弱、女性55パーセントとまだまだすべての人が読書を楽しむことができなかったのである（梅宮 3）。公開朗読に対してディケンズの見解ははっきりしないが識字率など当時の状況から判断すると、彼の公開朗読に対する1つの意義は、文字が読めない者に対して娯楽を提供することといえるであろう。このことから金銭面の問題で賛否両論あるが、公開朗読もディケンズが精力的に活動した慈善活動として挙げられる。

次にディケンズが長期に渡って継続的に活動した娼婦更生施設について論じる。ディケンズとクーツの共同慈善事業は1843年の貧民学校への視察から始まり、実際に本格的な活動に発展したのは、1846年のディケンズがクーツに宛てた売春婦のための施設設立のアイデアを述べた書簡からであった。書簡の中には施設の最終目標が述べられており、その内容は更生した女性を植民地に移住させ、現地在住のイギリス人と結婚させることであった。クーツは更生と結婚を共に考えることに反対したが、ディケンズは収容者に更生した「褒美」として結婚を与えるべきだとクーツを説得したと武井は述べている（188）。収容者はロンドン市内の刑務所の中から所長との面接と本人の意思を確認し決められ、はじめは13人であった。コテージでは時間厳守や清潔さなど秩序を乱さない行動を徹底し、女性の仕事とされる洗濯、裁縫、炊事の家事も学ぶことになっていた。また教育方針として、女性たちの自尊心や自制心を回復することを目標としていたため、懲罰を行うことや人格や素行を否定することは厳禁であった。施設作りの中でディケンズが注意した点は贅沢ではないものの衣食住を充実させることであった。衣服は自ら生地を買いに行き色やパターンを変え収容者全員が同じ服装にならないように努め、また更生施設とわからないように明

らかな名前は付けず天体の名前を取り入れ、ユーレイニア・コテージと名付ける配慮も行った。しかしこうした配慮が行われた一方、ディケンズは厳格な監視体制を敷いていた。収容者の行動や気質などをもとにポイント化を行い、ポイントを金銭に換算するシステムや監視者が監視することはもちろん、収容者同士で監視するようにベッドメイキングを他人が行うなど常に監視体制が続く環境を作ったのである。

コテージの運営は 1847 年から 1862 年まで続き収容者は合計で 150 人であった。すべての収容者の進路は明らかになっていないが、1853 年ディケンズ自らが編集を行う *Household Words* において彼はコテージの成功例を紹介している。それらによると 1853 年の時点で収容者は合計で 56 人となり、30 人がコテージでの生活を経てオーストラリアやその他の植民地に移住しており、その中でディケンズの最終目標としていた結婚ができたのは 7 人であった。残りの者は 10 人が強制退去、7 人が自主退去、7 人が逃亡、3 人が元の生業に戻るなど結果として半分の収容者が更生したと武井は論じている (190)。これらの結果から判断すると、最終目標には達成していないが約半分の者が植民地への移住を達成しており、この活動は成果を上げることができたといえる。しかし植民地先で結婚できた者以外はどのような生活を送るようになったのかは不明である。またコテージでの教育は主に家事などが基本となっており、独身である場合が考えられておらず、まさしく女性は家庭にいるべきであるという理想を強いているようにも感じられる。ディケンズのコテージ作りの配慮は、まさしく *Oliver Twist* に描かれているような悲惨な生活を貧民学校の視察で経験したことから得られた考えを反映したものであろう。しかし一方で監視体制を厳格にするディケンズの姿勢は更生を願ってのことであるが、役人同様の冷淡な行動のように思われる。武井の言葉であるが、ここに「ディケンズの二重人格的な側面」(198) が伺える。

最後にこれらのディケンズの取り組みや施設が上げた成果を通して、本節の目的であるディケンズの理想とした社会的救済方法とはどのようなものであったのかについて述べる。本節では教育問題に関して詳しく述べなかったが、実際に貧民学校に訪問し義務教育制定まで尽力している姿からも彼は下層階級の視点を常に意識しながら行動していたと考えられる。しかしその一方で前述したようにコテージの経営については「二重人格的な側面」があることが明らかとなった。彼は下層階級の者に安定した生活が過ごせることを願い、施設において教育や管理を厳格に行ったが、管理された環境の中で生活させることは、衣食住は整っているものの、自由を奪う行為に当たるのではないかと考えられる。本来どの程度の成果を上げることで更生とするのかが曖昧であり、ディケンズは結婚を最終目的とし家事を学ぶことを教育の一環としたが、女性は家庭に入るべきであるという中産階級のスタンダードにディケンズは囚われていると考えられる。上記のことから彼の理想としている救済方法は下層階級に中産階級のスタンダードを教えることであると考えられる。しかし彼は下層階級に対して何らかの形で手を差し伸べていたことは自明である。このような慈善活動に対する彼の姿勢は、以降の章で再度ディケンズは下層階級に寄り添

っているのか否かについて論じるにあたり重要な判断基準となる。

ここまで3節に渡ってディケンズの幼少期、ジャーナリスト、小説家としての地位を築く過程、慈善活動家として多くの社会問題を解決しようとする姿勢など様々な面を明らかにした。幼少期では彼は父親の借金により不安定な生活を送り、児童労働や教育など満足いく日々を送ることができないことに悩まされた。その後、彼は家計を助けるべく教育を諦め記者の道を歩むが、これが彼に転機を与えジャーナリストとして、さらにはジャーナリストの視点をもった小説家として名声を得るようになった。ジャーナリストや小説家として地位を確立する一方、彼は活動の幅を紙面上から実際の社会にまで広げ、下層階級に手を差し伸べたのである。もちろん彼の功績を考えると、ディケンズは「唯一無二」の小説家であると言えるが、生涯をみると特別な才能や特別な日々が彼を唯一無二の存在にしたのではなく、彼が経験した幼少期、ジャーナリスト、小説家、慈善活動など多くの日常は当時の社会を映し出しており、それら全てが重なり合ったことで彼を唯一無二の存在にしたのである。

次章では、ジャーナリストや小説家、慈善活動家として様々な顔を持ったディケンズが下層階級に寄り添った作品 *Oliver Twist* を執筆する背景やどのように諷刺を行ったのかを明らかにする。また本章で論じた彼の生涯を踏まえて、*Oliver Twist* における読者への主張は何かについて考察する。

2 下層階級の視点をもった作品

本章では、*Oliver Twist* 執筆の背景となる新救貧法がどのようなものであるかを明らかにし、作品内でディケンズはどのように新救貧法を諷刺したのかを論じる。また諷刺の仕方や作品の構成を通じ、ディケンズが下層階級へどのような救いの手を差し伸べたのか、作品の意義は何かについて考察する。一般的に研究者や読者の間で *Oliver Twist* は下層階級に寄り添った作品として扱われており、作品の内容は新救貧法を批判し国民感情を揺さぶるほどであった。*Oliver Twist* は下層階級の視点を持った作品であると扱われるのはなぜかを本章で明らかにしていく。

2-1 執筆の背景

本節ではディケンズが *Oliver Twist* を執筆するにあたり題材にした新救貧法や当時の社会について説明する。また新救貧法は社会にどのような影響を与えたのか、救貧院の実態を基に論じる。最後に新救貧法に対してディケンズの反応はどのようなものであったのか、彼の立場を明らかにする。*Oliver Twist* の前半部分では救貧院を舞台とし、新救貧法を諷刺しているため、この前半部分を通じ、ディケンズは何を主張していたのかを考えるため、執筆の背景を明らかにすることが必要となる。

Oliver Twist の題材となる新救貧法について説明する前に、なぜ救貧法を改正しなければならなかったのかについて説明をする。改正される以前の救貧法はエリザベス朝時代にまで遡った 1601 年のエリザベス救貧法である。その内容は、それぞれの教区の民生委員が貧者や病人、高齢者の救済を行うことであった。もちろん救貧法は社会福祉の役割を果たしていたが、産業革命以降、社会が大きく変化していく中で現実的に救貧法を機能させるためには改革が必要であったと英文学者の吉田一穂は論じている (2007: 1)。また社会福祉学者の矢野聡は新しく法律を改革しなければならなかった理由を以下のように説明している。1750 年代以降から救貧法救済支出が増加し、さらに農業不振やナポレオンとの戦争を経て失業者が増加したことなど、相次ぐ災難が重なり救貧法による経費は拡大した (799)。こうした状況を打破するため、1832 年に救貧法調査委員会が発足されたのである。委員は 9 人で構成され、中でも精力的に活動したのが、功利主義の創始者ジェレミー・ベンサムの方法哲学に影響されたナッソウ・セニアとベンサムの弟子エドウィン・チャドウィックであった。彼らは独自に調査を行い、やがて一般報告書を議会に提出した。その後議会において報告書の内容に修正が加えられたが、新救貧法の基礎となっている内容は彼らが作った報告書であったと矢野は論じている (804-805)。

報告書では全国的統一性の原則、劣等処遇の原則、労役場制度、以上 3 つの主要な原則が取り決められた。このうち全国的統一性の原則の中で最も重要となったのが恒久的な中央救貧行政当局の設置である。救貧行政の中央集権化により以前まで地方の教区によって救済処遇が異なっていたが統一されるようになった。また劣等処遇の原則では、救貧院内の生活は院外の労働者の最低生活に劣る水準と定められ、院内にいても、院外にいても子

供や大人に限らずすべての労働者にとって最低限の生活を送るしかなかった。これらの原則の目的は、救貧院を「極端に魅力のないもの」(2007: 2) とすることであったと吉田は論じている。新救貧法制定以前まで救貧院は貧民の宿泊先として扱われるようになっていた。しかし新救貧法により 3 つの原則を取り入れることで救貧院での生活を過酷なものにし、救貧院は「極端に魅力のないもの」と呼ばれるほどになったのである。新救貧法はこれらの原則により改悪された。なぜならこの法は貧しい者に手を差し伸べたものではなく、救貧税を負担している中産階級のためにあったからである。十分な生活費を稼ぐことができない労働者のためにあった院外救済は中産階級が負担する税金を上げる要因であり、この院外救済をなくすため、また院内でも院外と同じよう最低限の生活を与えるようにしたためと吉田は説明している (2007: 2)。

Oliver Twist が出版された年には次のような俗謡が流行った。クリスマスディナーの特別食として救貧院では濃厚なスープが振舞われるというありがたい計らいがあった。ところが次の日スープを楽しみにしていた一人の子供が行方不明になってしまった。少年たちは一生懸命探したが見つからず、数週間たったころ聞かされたのは濃厚なスープには少年も一緒に煮込まれていた、という俗謡である。この俗謡には人命の軽視の他にも、救貧院長の非人間性や教区民生委員の残忍な行為が淡々と描かれていると英文学者の西条隆雄は論じている (1998: 61)。このような俗謡が流行るほど新救貧法は批判される一方、他方では国費節約に大きく貢献し、実施前の 3 年間の平均額に比べ約 46% も減少するほどの結果を収め、当時の知識人らは高く評価した (西条 1987: 6)。その中で高級紙である *The Times* は一貫して新救貧法の非人道性に焦点を当て新法を非難したのである。*The Times* の立場は功利主義の考え方とキリスト教文明の求めるものとの対立を論点としており、*Oliver Twist* の最初の数章は *The Times* の考え方と一致する点があると西条は論じている (1987: 10)。このようにディケンズの描いた *Oliver Twist* 自体が社会的な影響力を持っていたことは明らかであるが、*Oliver Twist* は当時の俗謡や *The Times* の抗議などさまざまな要因とあいまったことでさらに影響力を強めている。

またディケンズが *Oliver Twist* を執筆するにあたって新救貧法批判を行っている *The Times* の立場を借りていることに加え、ディケンズ自身に救貧院の明確なモデルがあることが近年の研究で明らかとなった。歴史家のルース・リチャードソンによると、*Oliver Twist* 内における救貧院の描写が *Cleveland Street* にある救貧院に似ており、明らかな類似点として規定食が挙げられ、中でもおかわりを請うことは禁止されていた。またその救貧院の近くにディケンズ一家が住んでいたということも明らかとなっている (2)。このことから、ディケンズ自身が見たもの感じたものを執筆の材料としたことが考えられる。

文才をもつディケンズであるが、*Oliver Twist* は処女作を発表してから一年にも満たない期間で発表されている。作家として未熟なディケンズが短い構想期間で描かなければいけない状況を考えると、自らの立場を高級紙である *The Times* に寄せることも納得できる。しかし彼の立場が *The Times* に同調したものと指摘する以前に、ディケンズ自身が見たも

の、感じたものはおそらく衝撃的なものであっただろう。新救貧法の背景には中産階級の税負担を減らそうとする思惑があり、下層階級の救いを求めている者にとって新法は改悪となった。また *Oliver Twist* の連載が始まった年には救貧院の悲惨さを表した俗謡も流行る程であった。これほど新救貧法は実際に救済を受ける下層階級や雑誌や新聞を通じて悲惨さを知った中産階級などを含めた多くの国民の感情を揺るがし、このことに反応したディケンズは国民の代弁者として *Oliver Twist* を描いたのだと考えることができる。ディケンズは幼少期に下層階級として様々な困難に苦しめられた経験を持つため、下層階級の者と同じ視点を持って新救貧法は諷刺するべき対象としたのであろう。*Oliver Twist* 執筆の背景には社会の理不尽な構造によってつくられた新救貧法やそれらに苦しめられる貧民、そしてこの状況を批判する者、それらすべてを踏まえ、代弁者として立ち向かった作家がいたのである。次節では本節の執筆の背景で明らかとなった新救貧法はどのように描かれているのか、文章中や作品の構成に着目しながらディケンズの新救貧法批判について論じる。

2-2 作品における新救貧法批判

前節では作品の題材となる新救貧法についての内容や制定の背景、イギリス社会に与えた影響を説明した。またディケンズの *Oliver Twist* 執筆に対する姿勢は、当時の高級紙 *The Times* の立場に同調し描いていることが前節で明らかとなった。しかし彼は下層階級に成り下がり苦労した経験を持つことから、*Oliver Twist* はディケンズが下層階級の視点で国民の代弁者として執筆していると論じた。本節では作品において具体的にどのようにして新救貧法を批判したのかを登場人物の特徴やストーリーの構成を通じて明らかにする。これは前節の *Oliver Twist* 執筆の背景を受け、作品における諷刺を考察することでディケンズが持つ下層階級の視点がどのように作品に反映されているのかを明らかにするためである。

ディケンズの新救貧法批判は物語の初め、主人公オリバーの出生の場面から始まる。オリバーの母親は通りで倒れているところを救貧院で保護されたが、オリバーを出産するとすぐに死んでしまう。そこでオリバーについて説明されるのだが、その文ではオリバーは救貧院にとって新たな子どもとして扱われるのではなく「新たなお荷物」として扱われているのである。そこでこの説明をしている主語（新たなお荷物として扱っている者）に着目すると、このようにオリバーを扱っているのは救貧院を管理する者である。しかしこの作品の語り手はディケンズであるので、「新たなお荷物」として語っているのはディケンズ自身である。このように救貧院のあり方を批判するために相手の立場を借用して語っており、これにより作品の語りが皮肉のような雰囲気を出していると英文学者の小泉純一は論じている (78)。

また衣服を通じてディケンズは救貧院を批判している。オリバーの着ている衣服は使い古され黄ばんだキャラコの長着である。作中において、使い古されたキャラコの長着を着ることでオリバーが救貧院の孤児であることが鮮明に示されるとディケンズは説明している。ディケンズは黄ばむほど使い古された衣服を着させている環境を批判しながら、それ

以上に衣服は人を特徴づけることを示している。吉田はこの描写に対し、ディケンズはトマス・カーライルの *Sartor Resartus* (1836) に影響を受けていたことをこの文章で暗示しているのではないかと指摘している。この著書には衣服が個性を与え、差別を与えたというカーライルの主張が述べられていたと吉田は論じている (2007: 3)。ディケンズはカーライルの主張に同調し、古いキャラコの長着がオリバーに救貧院の孤児であるという個性を与え、また差別的なニュアンスを読者に伝えていると考えられる。

次に *Oliver Twist* の中で最も印象に残るとされる、オリバーが救貧院で粥のおかわりを求めるシーンでどのような諷刺がなされているかを考えてみる。救貧院の子ども達は飢えに苦しんでおり、その中でも年上の少年は飢えにより正気を失ってベッドの隣で寝ている年下の子どもを食べてしまいそうだと言う。少年たちはこの状況を打破するためにくじ引きで粥のおかわりを頼む役割を決める。そこで選ばれたのがオリバーであった。食事中に院長に粥のおかわりを頼みに行くのだが、院内の大人たちは顔面蒼白となり、オリバーは反逆者扱いされ監禁されてしまうのである。このシーンの中でディケンズが諷刺している対象は 2 点ある。1 点目は救貧院の食事についてである。前節で述べたように新救貧法は全国的統一の原則により様々な救済処遇を統一した。その中に食事の規定が加えられ、新法制定以前より質素な食事になったと西城は論文の中で指摘している。ディケンズはこのような実態から、飢えに苦しんでいる子ども達を描き新法の規定食を諷刺している。しかしこの諷刺には欠点がある。*Oliver Twist* 中の「毎日三度薄いおかゆ、週に二度たまねぎ、日曜日にはロールパン半分」(上巻 29) というオリバーが入れられた救貧院の食事は当時の報告書と比べると誇張した表現であると西城は指摘する。しかしこのように厳しい環境にあった救貧院の実例も数少ないが存在し、ただ単にディケンズが誇張した表現を使ったとは言えないという。このようにディケンズの諷刺には最もひどい例に依拠しながら構成していると西城は論じている (1987: 12)。

そしてディケンズが諷刺した対象の 2 点目は、救貧院内の役人についてである。作中で最も有名な粥のおかわりを求めるシーンの続きには、飢えた子どもたちに対して院長は太った健康な男であるというコントラストを使った表現をしており、役人への諷刺が強調されている。またオリバーの訴えを経て、役人たちはすぐさまオリバーを捉え監禁し特別会議室において事態の確認をする。会議ではオリバーの処遇について話され、委員の一人は縛り首だと発言するが、その後オリバーを徒弟奉公に出すことで会議は終結するというシーンが続く。このシーンから、子ども一人が食事のおかわりを求めるだけで役人たちは過剰に反応している様子がうかがえる。ディケンズはこのシーンで組織を維持管理することにのみとらわれている役人の姿を強調していると小泉は論じている (83)。食事を切り詰めることを選んだ委員の立場からみると、政策に刃向うことは言語道断なのである。また縛り首だと発言するように役人たちの冷酷さがみられる。これほど役人らは貧民への処遇を厳格に新救貧法に則って行っているのである。つまりディケンズは食事内容などを含む制度の悲惨さを「役人の人道的性格の欠落」(1987: 13) に還元し、いろいろな場面を通じて

救貧院制度や新救貧法の批判にかえていると西条は論じている（1987: 12-13）。

救貧院の制度の悲惨さを役人の人道的性格の欠落に還元していると前述したが、その代表が教区史を務めるバンブル氏であると西条は論じている（1987: 13）。教区史は基本的には教会区の役人の全般的な補佐役であり、決定権や定まった任務を持たない職務である。彼らの制服を構成するものは、印象的な杖や金のレースで縁取った三角帽でありバンブルを象徴する特徴として描かれている。吉田はこのような外見について、「こうした古めかしい格好は、この役職そのものが時代遅れになりつつあったことを示している」（2007: 6）と指摘している。オリバーが古いキャラコの長着を着た描写は救貧院の孤児と特徴づけ差別的な印象を与えているということと同様に、バンブルが身にまとったものは教区史という特徴を与え、また時代遅れな職務であるとディケンズは揶揄している。バンブルの性格は極めてわかりやすく、もはや「喜劇人物」（1987: 13）であると西条は論じる。バンブルは自分より身分の上の者には謙り、身分の下の方には威張るといった性格である。また教区や自身の利害について非常に敏感であり、オリバーを年季奉公に出す際にも、「親のいないお前にとって親同様の親切でやさしい先生方が、お前を年季奉公に出して下さろうとおっしゃるんだ」（上巻 42）と言うが、その後「もっともお蔭で教区にや三ポンド十シリングという費用がかかるんだがな」（上巻 42）と付け加える。こういった台詞からも教区の利害を考えている点や貧民に対して冷酷な態度を突きつける様子もうかがえる。このようにバンブルは喜劇人物と言われるほど極めてわかりやすいくらいに悪人であり、役人の人道的性格の欠落の象徴である。

また性格以外にもディケンズはバンブルを批判している。物語後半においてバンブルはマン夫人へ文句を言う場面がある。そこでバンブルは自身が教区の務めを果たしていることを強調するため「教区」の形容詞を4回も使っている。本来、教区の形容詞は *parochial* となるが、バンブルの発音に基づいていると思われる本文中の教区の形容詞は *porochial* とつづりに誤りがある。小泉は間違った言葉を使うほどバンブルの軽薄さが強調されると論じている（81）。このようにバンブルはしっかりと単語が発音できない者として扱われている。ディケンズは役人の人道的性格の欠落を指摘することで新救貧法の批判を行い、また正確に教育されていないバンブルを描くことで、無知でありながらも役人は務まるといった社会を諷刺している。

バンブルを喜劇的キャラクターとして描いたように、*Oliver Twist* には喜劇的要素と悲劇的要素が含まれていると英文学者の山崎真由美は論じている。先ほど述べた、作中にある救貧院の食事のシーンでは「炉の煉瓦までむさぼり食ってしまいそうだ」（上巻 31）と滑稽な言い回しを使い、端的に子ども達の飢えの様子を表現している。このようなユーモアな表現はただ単に可笑しくしているだけではなく、残酷な意味を伝えているがゆえに、結果として悲劇的な余韻が作中に残ると山崎は述べている（67）。この観点から、再度救貧院での粥のおかわりを求める場面を考察すると、オリバーの発言に対してざわめき、過剰に反応している役人たちは喜劇的に描かれ、その後のオリバーの処遇については悲劇的に描

かされている。最も印象的な場面だとされるこのシーンはこのように喜劇と悲劇が組み合わせられている。山崎が「ディケンズの描く喜劇は、読者の心を躍らせ、一方、悲劇は読者の同情心と問題意識を促す力がある」(70)と論じているように、食事のシーンにディケンズの諷刺の方法が顕著に表れているのではないかと考えられる。

本節ではさまざまな作中の表現を通してディケンズの新救貧法への諷刺について論じた。ディケンズは諷刺の方法として、動作主の立場を借用して皮肉らしく語る点や、衣服を通して批判する点、コントラスト、喜劇と悲劇の組み合わせ、など様々な手法を使って新救貧法や救貧院、役人を強く批判していることが明らかとなった。前節で高級紙 *The Times* も新救貧法を批判していたと述べたように、下層階級の人々のみが新救貧法に反発したわけではない。ディケンズの諷刺に込められた下層階級の視点は、実際に下層階級の人々やディケンズ自身が苦しんだであろう労働や食事などの場面を織り交ぜて、下層階級の人々が共感を得るように描きながら、多くの人々が新救貧法への問題意識を促すように描いているのではないかと考えることができる。その際にディケンズは多くの下層階級の人々が体験したような苦しい生活ではなく、飢えに苦しんで人をも食べてしまいそうな子どもを登場させるなど最も印象に残るような、実際の下層階級の生活を超す恐ろしい生活環境を提示している。中産階級の人々には大げさなように見え喜劇的に捉えられる一方で、ディケンズはあくまでも下層階級の人々の共感を得るだけではなく、同じ立場の人々も考えられないような最低な生活を描き、少しの安心を生むような視点で *Oliver Twist* を執筆したといえる。下層階級の人々に安心感を与える作品という観点から *Oliver Twist* を読むと、物語は大団円を迎えるように描かれている。次節では *Oliver Twist* のストーリー構成や結末から、ディケンズが下層階級の人々に何を訴えたのかについて考察する。

2-3 下層階級へ希望を与える結末

前節では新救貧法の具体的な内容を基にディケンズは作品内でどのように諷刺をしていたのかを論じた。ディケンズの諷刺の仕方は様々であるが、中でも下層階級の人々にとっては自らの生活よりも過酷な生活が作中で描かれており、下層階級の人々に安心感を与えていると考えられ、様々な諷刺の中で共通しているのではないかと論じた。本節では *Oliver Twist* は下層階級の人々に安心感、または希望を与える作品として扱い、作品の構成や結末を通してディケンズは何を訴えたのかについて論じていく。一般的にディケンズは下層階級の視点を持っていると解釈され、これは諷刺において明らかである。同様に主人公が幸福な結末を迎えることや反対に主人公と対立する登場人物が悲惨な結末を迎えることなど、物語の印象を決める結末に焦点を当てることでディケンズの訴えが明らかとなり下層階級の視点がより鮮明になると仮定し、本節では作品の構成や結末について考察する。

はじめに主人公オリバーに着目したストーリーについて論じる。オリバーは救貧院を離れ奉公先の葬儀屋へ出されるが、過酷な労働や家族からの虐待を受け、逃れるためロンドンへ向かうことを決心する。英文学者の松村昌家は、このようにロンドン行きを決心する

オリバーはイギリスの民衆の生活に密着していて、英雄化し神格化した少年主人公像と全く同一であると論じている（1979: 38）。その主人公像の代表に挙げられるのがイギリス人の生活の中に浸透していたおとぎ話の主人公 Dick Whittington である。彼はある地方の荘園領主を父に持つ少年であったが、次男だったために財産の相続権を持つことのできない不遇の立場にあった。そこで彼は奮起しロンドンへ行き、遂には 3 度もロンドン市長になるのである。松村はこのおとぎ話はイギリス人なら誰でも知っている成功物語であり、労働や虐待など不遇の生活から逃れ、ロンドンへ行くことを決心するオリバーの姿は Dick Whittington とそっくりであると述べている（1979: 38）。このようにイギリス国民ならば誰でも知っているようなおとぎ話の主人公と同じスタイルを用いることによって、読者の共感を得ることができる。「運を求めて」旅立つというモチーフは、Dickens と一般大衆との間をつなぐ太い絆であった」（1979: 39）と松村は論じている。*Oliver Twist* は特異なストーリー展開を用いるのではなく、馴染みの成功物語を踏襲することによって多くの読者に *Oliver Twist* も成功物語であるという共感と後に好転するであろうという期待を与えている。

成功物語のパターンを忠実に踏襲する *Oliver Twist* の中で、主人公オリバーはどのような成功を得ることができたのか、それは 2 つある。1 つ目はオリバーが犯罪の道に踏み込まなかったことである。オリバーはロンドンへたどり着いた後に再び飢えに苦しむが、それを助けたのがスリ少年のアートフル・ドジャーであった。そしてアートフル・ドジャーに紹介されたのが親方のユダヤ人のフェイギンである。フェイギンは救貧院では考えられない豪華な食事を与える老紳士であるが、徐々にオリバーにゲームのようにしてスリを教えこみスリ集団の一味として犯罪の道へ導く。そしてスリの実行とは知らずにロンドン市内に連れ出された際にオリバーははじめて自分たちがスリをしていることに気付くが、時すでに遅くスリの実行犯であると濡れ衣を着せられ判事のもとへ連れられる。しかしそれが幸運し、慈悲深い紳士ブラウンロー氏と出会う。その後何度かフェイギン一味によりオリバーは危険にさらされるが、ブラウンロー氏らによってオリバーは危険な状況から救われ、最後にはオリバーの身元がブラウンロー氏の友人の子どもであることが判明しオリバーを養子にする。ディケンズは一生を通してヴィクトリア朝時代において貧困と無知が犯罪の原因となると力説した、とウィルソンは論じている（114）。このようにディケンズにとって、意図せず貧困と無知を兼ね備えたオリバーがブラウンロー氏らの救いにより、犯罪の道を逃れることができたのは偶然ではあるが、成功なのである。

そして前述したあらすじにあるように、2 つ目の成功はオリバーが家族を得ることである。両親のいない孤児にとって家族ができることは精神的な支えが得られるというだけでなく、階級を得ることができるということなのである。下層階級であるオリバーはブラウンロー氏の養子になることで中産階級になり、救貧院にいた頃とは全く別世界のような生活を送ることができる。当時産業革命以降、資本家であるブルジョワジーの出現など社会的流動性はあったものの、両親のいない孤児の少年がこのように中産階級になるという社会的地

位の向上はまさしく Dick Whittington の成功物語と同様、もしくはそれ以上に奇跡的な成功体験なのである。

このようなオリバーの成功物語の反対には悪人たちの悲惨な結末があった。救貧院の役人の代表とされるバンプルはそのうちの一人である。前節で述べたようにバンプルは自身の利害に非常に敏感であり、救貧院の院長が亡くなった後に、院長の夫人であるコーニーに言い寄る。これは自分が院長へ昇進できると考えたからである。しかしバンプルの思うようにはならず、救貧院の支配権はコーニー夫人にあった。さらにバンプル夫婦はオリバーの出生の秘密を隠した罪を暴かれ、地位を失い困窮し、ついに救貧院に入る貧民にまで成り下がるのである。「ディケンズは、弱い者いじめをする役人の代表的人物バンプル氏に屈辱を味わわせることにより、因果応報を示している」(2007: 8) と吉田は論じている。

また同様にスリ集団の親玉であるフェイギンや盗賊のサイクスなど多くの悪人が裁かれている。サイクスは娼婦のナンシーを撲殺した後、隠れ家に逃げ込むが押し寄せた警察に怯え、屋上から飛び降りようとしたところあやまって首にロープが絡まり死亡する。フェイギンは自身の行う悪事が明らかとなり、裁判で死刑になる。死刑間際でもわめき散らし、神を冒瀆し、反省を見せないまま絞首刑を実行される。この二人の悪党に共通する特徴は全く反省的態度が見られないことである。この悪因ゆえにディケンズはフェイギンもサイクスも死に至るということを示している、と吉田は論じている (2014: 34)。フェイギンやサイクスとは反対にオリバーは不遇の境遇であったが、ブラウンローと出逢って以降、教会に通い聖書の勉強をするなど神を敬い、悪に染まることなく最後は幸福を得ることができたのである。

Oliver Twist の善の世界と悪の世界の結末は顕著である。善の世界では、オリバーは不遇な境遇にあっても自ら悪に染まらない強い心を持っていたために犯罪の道を逃れ、最終的に中産階級の紳士の養子となる。それに対し、悪の世界にいるフェイギンやサイクスは犯罪に手を染めたにもかかわらず反省的態度が見られなかったために死に至る。このように *Oliver Twist* の世界では善と悪がはっきりと分けられ、また物語の結末から分かるとおりの勧善懲悪の物語になっている。また勧善懲悪の物語とは別にイギリスでは馴染みのあるおとぎ話を踏襲することで、より読者に分かりやすいストーリー展開を提示している。下層階級の生活を経験したディケンズだからこそ、善の心を持つ者は救われ、悪の心を持つ者は罰せられるべきと強く考えたのであろう。それはディケンズが下層階級に成り下がった時に描いた理想でありながら、読者に向けて訴えた彼の主張であったと考えられる。貧困状態になり教育も満足に受けることができなかつたディケンズ少年は犯罪の道に進むことなく善の心を持ち続けたことで小説家としての名声を得るようになった。ここにディケンズ自身の体験と主人公オリバーの行動が重なる。ディケンズが下層階級から小説家として名声を得るまでになったと知る者は当時親類しかいなかったが、自らの経験をオリバーに重ね、作中でオリバーが幸福な結末を得ることで、善を尽くせば幸福になれると下層階級の人々に希望を与えたのである。

本章では執筆の背景や諷刺の対象や仕方、物語の結末を通して *Oliver Twist* はどのように描かれているのかを論じた。社会の理不尽な構造によってつくられた新救貧法やそれらに苦しめられる貧民がいることを背景とし、その状況にディケンズは異論を唱えるため *Oliver Twist* を執筆した。また諷刺の対象は救貧院での生活やまた救貧院を管理する役人であり、これらの対象をさまざまな手法を使って強調しながらディケンズは批判をした。ディケンズの意図は下層階級から共感を得るだけではなく、作中の貧民の生活を当時の下層階級の人々の生活より過酷に描くことで下層階級の人々に安心を与えることにある。物語の構成も同様に、馴染みのある成功物語を踏襲することで読者に物語が好転することを暗に示し、主人公が中産階級の養子となるといった下層階級の人々にとって希望を与えるような結末を描いている。これを単におとぎ話としない要因はディケンズが得意とするリアリティーの存在である。リアルに描かれたロンドンの街の中で成功を遂げたオリバー少年の物語に読者は身近に感じられるような感覚を覚えるのである。このようにディケンズの執筆、諷刺、物語の結末の先にはすべて下層階級の人々を想う姿勢が感じられる。自ら貧困に苦しめられた経験をもつディケンズであるからこそ当時の心境に立ち返り、希望や安心を見出せるように *Oliver Twist* を描いたといえる。このことから *Oliver Twist* はディケンズが下層階級の視点を持って描いた作品なのであるといえる。

本章で *Oliver Twist* を下層階級の視点を持った作品であると論じたが、次章ではこのディケンズの下層階級の視点を懐疑的に考察する。一部の研究者の中で、*Oliver Twist* は中産階級を味方した作品とされている。次章では *Oliver Twist* における登場人物やストーリー展開の欠陥部分を指摘し、最後にディケンズは *Oliver Twist* を下層階級の視点で描いたのか、それとも中産階級の視点で描いていたのかについてどちらが妥当であるかを検討する。

3 *Oliver Twist* に対する批判的な評価

本章では、前章で論じたディケンズの下層階級の視点を懐疑的に捉えて、*Oliver Twist* における登場人物やストーリーなど作品の欠陥部分を分析していく。またそれらの欠陥にはどのような意図が含まれているのか、ディケンズの中産階級の視点があるのではないかと想定し、中産階級の視点の有無について論じる。そして最終的に *Oliver Twist* は下層階級に寄り添った作品であるか、それとも中産階級の視点で描かれているのかについて判断を下すことにする。

3-1 主人公の行動の変化

本節では松村やウィルソンらが指摘する主人公オリバーの受動性について考察する。作中では救貧院内では飢えに苦しんだ末、自らの力で劣悪な環境を打破しようと院長に粥のおかわりを求めるなど主人公の行動が能動的であった。しかし 8 章のオリバーがロンドン行きを決心する場面以降からオリバーの能動的な行動がみられず、むしろ受動的になっている。このように主人公の行動が能動的から受動的に変化していくのはなぜか、ディケンズが意図したものは何かについて本節を通して論じる。

はじめにオリバーの行動が転換する契機となる、年季奉公の家からロンドンへ逃亡する場面が描かれる 8 章以前のオリバーの行動について論じる。8 章以前は救貧院の生活から年季奉公先での生活がメインとなるが、初めに救貧院での生活について述べる。オリバーを含む救貧院の子どもたちは飢えに苦しみこの状況を打破するため話し合い、院長に粥のおかわりを求める役割をくじ引きで決めた。その担当となったのがオリバーである。おかわりを求める前のオリバーは、作品内で「子供とはいえオリヴァーは空腹のあまりやけくそになり、惨めさがつのってどうにでもなれという気になった」(上巻 31) と描かれている。くじ引きで決めたとはいえオリバーも他の子ども達同様、空腹に苦しんでおり、無鉄砲に行動する子供らしさを感じられる。また粥のおかわりを求めたことで罰として、オリバーは年季奉公に出されサワベリー夫妻の葬儀屋で生活する。そこではサワベリー夫妻、徒弟のノア・クレイポール、女中のシャーロットから虐待を受ける。中でもノアはオリバーを完全に下の人間とみなしている。ノアの仕打ちに耐えていたオリバーだが、母親のことを侮辱されたとき彼の忍耐は限界に達する。ノアがオリバーの母親を「全くどうしようもない、極道女だったのさ」(上巻 83) と言うと、オリバーは次のように激昂したのである。「激怒のあまり顔を真っ赤にしたオリヴァーはさっと起き上がると、椅子とテーブルをひっくり返し、ノアの咽喉もとをつかまえると怒り狂ってゆさぶったので、相手の歯がちがち鳴った。それから全身の力を一撃にこめると、彼を床の上に殴り倒した」(上巻 83-84) それまでノアに抵抗せず弱気なイメージを与えていたオリバーであるが、この瞬間感情を爆発させる。吉田はこの行為に対して、オリバーがロンドンに逃れる前段階としての意味を持つと指摘しており、これを「精神の監獄状態を打ち破る」(2007: 6) と論じている。このようにオリバーは行動の転換となる 8 章のロンドン行きを決心するまでに自らの感情を

露わにし、精神の監獄状態を徐々に打ち破っていく。

そして物語とオリバーの行動の転換になる 8 章は、オリバーが奉公先の虐待から逃れるためロンドンへ行くことを決心するという内容である。前章で述べたように、作中の 8 章は運を求めて旅立つ、というイギリス人であれば誰でも知っているような成功物語に沿って描かれている。このようなモチーフはディケンズと一般大衆をつなぐものであったと論じた。8 章の冒頭でオリバーは以下のように決心する。

「ロンドン！ ——あの大都会！ ——あそこなら誰だって——バンプルさんにだって——見つかりはしない！ それによく救貧院の年寄りたちがしゃべっていたのを聞いたことがある。ロンドンなら元気のいい若い者が食うにことかくことないさ。あの大都会へ行けば、田舎で育った人間には思いもよらないような暮らし方が、いろいろあるもんじゃ、と。誰かが助けてくれない限り、道端で行き倒れになるに決まっている宿無しの子供にとって、ロンドンこそもってこいの場所じゃないか。こういった考えが彼の心の中に浮かんで来ると、彼はぴよんと立ち上がって、また歩き出した」（上巻 99-100）

先ほどのノアの時とは違うが、オリバーの決心が前面に表現され、希望に満ち溢れている。松村は若い主人公のほとんどがこのような経験をしており、執筆された当時、産業革命によって旧秩序が崩壊した後の流動的な社会において、大衆の指向と行動の多くがこのパターンに集約されていると指摘している（1979: 39）。このような指摘から、物語の転換となるこの場面は成功物語を踏襲する文学的な要素と当時の社会を映し出すリアリスティックが混在している。しかし、この章を機にオリバーの能動的な行動は徐々になくなっていく。

8 章以降のオリバーは「全く受動的な子どもに逆もどりしてしまう」（1979: 39）と松村は指摘している。ロンドンに着きスリ集団に入り込んでしまうが、幸運にも善良な紳士のもとで保護され幸せな生活を送る。しかし幸せな生活は長続きせず、すぐに淑女のナンシーに連れ戻されてしまう。その場面でオリバーは身の危険を感じたにも関わらず、もがき叫ぶだけでありナンシーのいいように言いくるめられ、スリ集団に再び入れられる。8 章以前であればオリバーはすぐさま暴力をふるい感情を前面に出していたが、オリバーはもはや大人に流される受動的な子どもである。また行動の変化はオリバーのキリスト教的な態度からもみられる。8 章以前の救貧院に入る場面では、オリバーは役人に「お前に食物を下さり、面倒を見て下さる方々のためにお祈りしとるじゃろうな——キリスト教徒らしく」（上巻 27-28）と言われとっさに肯定するが、実際には、彼はお祈りの仕方を知らなかった。しかしローズ（後にオリバーの叔母であることが判明する）の家で保護されたのちには、オリバーは読み書きを教えてもらい勉強をしている。また日曜日には教会に通い、以前はできなかったお祈りができるようになっており、オリバーは中産階級の子どものように行動している。このようにオリバーは 8 章以降では自らの手で環境を変えようとせず、む

しろ環境に適応していこうとする態度がみられる。

なぜオリバーの行動は能動的に自身の環境を打破していこうとする姿勢から、受動的な子どもに逆もどりしてしまったのだろうか。それはディケンズが作品の構成を8章を境に変えたからである。*Oliver Twist*の大枠は前章でも説明したようにイギリスのおとぎ話にある成功物語を踏襲している。8章以前では救貧院での劣悪な生活や年季奉公先の過酷ないじめなど、ウィルソンの言葉で言うならば、ディケンズの「ジャーナリズムの世界」(112)に近い。また前半部分が社会諷刺を主としているのは明らかであろう。しかし後半のオリバーがロンドンへ逃亡したのちにはメロドラマ的な要素を多く含んでいる。偶然出会ったブラウンローやローズがオリバーの味方となり、最終的に父の友人や母の妹であることが判明するなどストーリーがリアリティに欠け、感傷的である。ウィルソンはジャーナリズムの世界からメロドラマに変化したこの作品を「2つの小説」(112)として解釈しており、そしてこの2つの小説をつなぐのが主人公のオリバーであると論じている(112)。一般大衆はこの作品を読むとき、被搾取者側(オリバー)に同情を寄せたくなるが実際に起きている貧困や孤児、犯罪などについては細かく詮索しない。そのためオリバーは「リアルであってはならない」とウィルソンは述べている(115-116)。もしオリバーが当時のロンドンにいる孤児であれば、スリ集団に入りすぐさまスリを覚え犯罪を行うことで生活をしているかもしれない。そのように考えると、オリバーの行動の意思が作品の前半部分と後半部分で変わっているのはオリバーをリアルな存在にしないためであり、言い換えれば、当時の貧困に苦しむ孤児とは遠ざかった存在にするようにディケンズが作品の構成を変化させた結果なのである。

本節では主人公オリバーが8章を境に能動的な態度から受動的な態度に変化した理由について検討した。8章以前はジャーナリスティックに描かれ、社会諷刺の役割を果たしている。しかし8章以降はメロドラマ的な要素が主となりオリバーはリアルな存在にならないように描かれていることが明らかとなった。その背景には一般大衆である読者が存在していることを忘れてはいけない。これらを踏まえ、次節では主人公の態度の変化に加えて批判されるストーリーの偶発性について論じる。

3-2 ストーリーの偶発性

本節では前節に続き、*Oliver Twist*において一部の研究者に批判される作品の構成について、果たしてその批判が妥当であるかを検討する。前節の最後でアンガス・ウィルソンは*Oliver Twist*は2つの作品であると指摘していると述べた。作品の前半部分はジャーナリズムの面が強く、後半部分はメロドラマ的な要素が多く含まれているためである。また作品の後半では、主人公オリバーの出生の秘密を探ることに焦点が当てられ、作品の結末ではオリバーは家族を見つけ、中産階級の紳士の養子になることで社会的地位を得る。このように前半部分のジャーナリズムと後半部分のストーリーのつながりは弱く、また後半部分は偶発的である。これらの点から *Oliver Twist*は批判的な評価を受けている。本節では

前半と後半のストーリーの繋がりや後半部分に多くある偶発的なストーリー展開などに注目し、なぜディケンズはこのように描いたのかについて論じることとする。

はじめに作品の前半部分のジャーナリズムと後半部分のメロドラマ的な要素のつながりの弱さについて論じる。この作品は 1834 年に成立した新救貧法を批判するため、ディケンズが国民の代弁者として描いたものであると前章で述べた。そのため作品の前半では舞台を救貧院に設定し、諷刺を行っている。ディケンズは救貧院での悲惨な生活や救貧院にいる役人の非人道的な態度を描き、新救貧法を批判している。また新救貧法を批判するディケンズの立場は高級紙 *The Times* に同調しており、救貧院での場面はジャーナリズム性が高い。本論文で既に指摘しているように、救貧院での悲惨な生活はすべてがリアルに描かれているのではなく誇張して描かれているが、最も悲惨な例に依拠しながらディケンズは描いているためジャーナリズム性が高いといえる。しかしロンドンへ旅立つ 8 章を境に *Oliver Twist* はメロドラマ的な要素が強くなる。松村は *Oliver Twist* のテーマである孤児の少年の運探しを「ファンタジー」と呼び、19 世紀において小説に必要なことは、少年主人公の夢の成就の手段が何であったかを描くことであり、そしてそれに主人公の意志力と忍耐力などによって運がよくなる意味が伴わなければならないと松村は論じる (1979: 41)。 *Oliver Twist* の第 8 章では救貧院や年季奉公先の悲惨な生活から逃走し、自身の生活のため意志を持って行動している。またそれ以降、オリバー自身はスリ集団の中で受動的な行動をとり、悪環境から脱せずただ耐えるという物語になっている。その 2 つの要因は松村のこの主張を参考にすると、「ファンタジー」の型にはまっていると考えることができる。

また西城は別の視点で *Oliver Twist* の物語的な要素を指摘している。作中 12 章でブラウンローの家で女性の肖像を見たときオリバーは「まるであの人が生きていて、ぼくに何か話しかけたいんだけど、口がきけないみたいなので」(上巻 152) と述べている。これはハムレットに父王の亡霊の姿をありのままに表現するホレイシオの言葉と同じであると西城は指摘している (1987: 15)。『ハムレット』の有名な場面を利用することで、女性の肖像がオリバーの母親であることを暗に示しており、12 章のこの場面からオリバーの身元の秘密を探るロマンスになると西城は論じている (1987: 14-15)。このように前半のジャーナリズムの要素に比べ、後半は有名な劇のひとつである『ハムレット』の台詞を利用しておりファンタジーのようにリアリティーに欠けるような要素が強くなる。また前章で述べたイギリス国民であれば知っているような Dick Whittington の物語を利用していることも『ハムレット』同様、ストーリーに重きが置かれ、ジャーナリズムから離れているようになったといえる。

以上のことから 2 つの小説であるかのように前半と後半の物語のつながりは弱いということが確認できた。なぜこのようにストーリーの繋がりが弱いのか、それは物語後半のストーリーの偶発性やその意図を考察することで明らかとなる。前半は新救貧法や救貧院への批判である一方、後半はオリバーがどのように社会的地位を獲得するかについて焦点が当てられている。物語の結末に向かうまでオリバーは善人であるブラウンローらと悪人の

フェイギン一味の間を行き来するが、善と悪の狭間にいるオリバーの物語と並行してオリバーの出生の秘密を探る物語が始まる。ここにわか仕立てのストーリーが存在するのである。オリバーの異母兄弟であるモンクスと救貧院の役人バンプルが出会い画策することや、オリバーがブラウンローに偶然出会いそしてブラウンローがオリバーの父の友人であること、などオリバーの周りには偶然の出来事が多い。しかしそれ以上にオリバーの素性はとってつけたような物語であるように考えられる。もともとオリバーはモンクスの異母兄弟であり、父親が亡くなったとき遺言書によりオリバーは多額の財産を譲り受けることになっていたのである。作中でオリバーが会うローズやモンクスは最後にはオリバーの血縁関係にあることがわかる。しかしそれは偶然の出来事であり、前節で述べたようにオリバーの意志とは関係なく受動的な出会いなのである。このようにオリバーの出生の秘密を明らかにする物語には偶然の出来事が多い。またその偶然はオリバーの能動的な行動によって得られるものではなく、オリバーの周りの大人たちの行動によるものである。

ではなぜオリバーの出生を巡る物語に変化するにつれ、偶然の出来事が多く描かれるようになったのか。それはこの作品の前半に提示した救貧院での悲惨な生活や非人道的な役人などの社会問題と対峙する孤児への解決策をディケンズは肉親の愛情を受けることとしたからである。ディケンズは貧困者を助けるには制度以前に他者への「憐れみ」の心を持つことを必要としていたと小泉は分析している。その上で全く知らない第三者が憐みの気持ちを持つより、肉親が憐みの気持ちを持つ方がリアリティーは増すとディケンズが判断した結果、より感傷的になっていると小泉は指摘している(90)。ここに *Oliver Twist* のメロドラマ的な要素が見受けられる。ディケンズは前半に挙げた救貧院や新救貧法、それらに苦しめられる孤児への救済方法を肉親の愛情を受けることとしたため、物語の終盤ではオリバーの血縁関係にあるローズやモンクス、またオリバーの父親の友人であるブラウンローの登場など偶然の出来事が増えるのである。

このように貧困に苦しむ孤児の問題の解決策を肉親の愛情に求めたことに、ディケンズの意図が隠されているのではないかと考えられる。ディケンズはこの作品の前提として孤児が生活するには救貧院は望ましいものではないが、制度としての孤児の救済に限界を感じていたと小泉は論じている(89)。ジャーナリストとしてディケンズは救貧法が改悪されたことや、救貧院での悲惨な生活を目の当たりにしているが、駆け出しの小説家としてディケンズは社会制度や上流階級の貴族などに批判を浴びせ、社会機構を変革することはできなかった。そのためディケンズは制度を変えるのではなく肉親の愛情に解決策を求めたのである。作品内でディケンズは慈悲(mercy)と憐れみ(pity)を意図的に使い分けている。オリバーが孤児であることを初めて説明する場面で語り手はpityという単語を使い、オリバーは誰からも憐れみをかけてもらえないと説明し、その後オリバーのこれからの生活については教区委員や監督者の優しい慈悲に委ねられていると説明する文においてmercyという単語が使われている。これに対して小泉は「ディケンズは、“mercy”ではキリスト教の慈善のニュアンスを暗示させ、“pity”の方は人間の自然な感情に基づかせてい

るのではないだろうか」(79)と分析している。救貧院の生活は悲惨ではあるが、オリバーは形上の慈悲(mercy)を受けることはできる。一方で誰からも憐れんでは(pity)もらえない。しかし物語の後半で登場するローズの存在によってオリバーは憐れみの気持ちを受けることができるのである。ローズの邸宅に強盗として無理やり入れられたオリバーは悪党の一味として疑われたが、ローズは必死にオリバーを庇う。当時の社会状況からして子どもだからと言って悪意がないとはいえずらい。そのような状況であるにもかかわらずローズは「かけてやれる今のうちに、どうかあわれみをかけてあげて下さいまし！」(上巻394-395)と憐みの必要性を説くのである。このときオリバーは他人の「自然な感情」を受けることができる。このときはまだ明らかになっていないがローズはオリバーの母親の妹であるので、ここに肉親の愛情が描かれている。ローズが救いの手を差し伸べたことにより、その後オリバーは刑務所に連れられず、また最後には幸せな生活を送ることができるためローズのこの行為が大きな転機になったといえる。したがってディケンズは孤児の救済方法を制度ではなく個人的な愛情、さらには肉親の愛情を受けることに見出したといえる。

本節でははじめに作品の前半と後半のつながりの弱さについて論じた。前半のジャーナリスティックな物語から一転、後半はファンタジーの要素が強くなり、それらは Dick Whittington の物語を踏襲することや『ハムレット』の台詞をそのまま引用するなどファンタジーのようにリアリティーに欠けていることから明らかである。そして感傷的な要素が増える後半では偶然の出来事が多く描かれる。またオリバーが中産階級の養子に社会的な地位を上げるきっかけとなる出生の秘密に関わることになる、ブラウンローやローズ、モンクスの登場など偶然の出来事が重なるのである。偶発的なことが重なる理由はディケンズが考える孤児への救済方法を提示した故の結果であった。ディケンズは新救貧法や救貧院での悲惨な生活に苦しむ孤児に対して、肉親の愛情を与えることの必要性を説いた。社会制度を変えることはできないが、救貧院の形上の慈悲ではなく人間的な感情や肉親の愛情を受けることによって孤児を救うことができるとしたからである。前半で提示した貧困の問題を後半では制度ではなく肉親の愛情で解決するため、物語は偶発的になってしまったのである。ここに社会機構を変革するまでの力を持たないディケンズの限界がみられる。以上を踏まえると、ストーリーが偶発的であるという批判的な評価は妥当であるといえる。次節では、第3章第1、2節で論じた欠陥部分を踏まえ、ディケンズの中産階級の視点の有無について論じる。

3-3 中産階級的価値観の検討

前節では *Oliver Twist* におけるストーリーの繋がりの弱さとストーリーの偶発性について論じた。なぜ偶発的なストーリーが増えたのか、それはディケンズが物語前半に挙げた新救貧法や救貧院での悲惨な生活に苦しめられている孤児への救済方法を肉親の愛情を受けることに求めたからだとし、社会問題を肉親の愛情で解決しようとする姿勢に社会機構

を変えられないディケンズの限界がみられると論じた。本章で論じた主人公オリバーが物語後半になるにつれ受動的な態度に変化することやストーリーが偶発的である理由はディケンズが中産階級の視点からこの作品を描いたからではないかと想定し、本節ではディケンズの中産階級の視点の有無について論じる。また本論文第一章で述べたディケンズの生い立ちと *Oliver Twist* の関わりについてディケンズがどのような態度で執筆したのかを再度考察する。そして最後に、前章で論じてきた *Oliver Twist* はディケンズが下層階級の視点で描いた作品であるという観点と本節で明らかにする *Oliver Twist* は中産階級の視点で描かれているという観点を比較の上、どちらの観点が妥当であるかを結論づける。

はじめに本章第一節で述べた主人公オリバーの行動の変化について論じる。第一節で論じたように、オリバーは物語後半になるにつれ自らの力で環境を変えようという意志が弱まり、受動的な態度になっている。そしてその理由を本論ではウィルソンの「オリバーをリアルな存在にしない」という主張を参考に、ディケンズは読者の存在を意識してオリバーに同情を寄せられるように描いたためと推察した。このようにディケンズは読者との繋がりを非常に大切にしている。トマリンによると、ディケンズにとって自身と大衆が繋がっているという感覚が作家として伸びていくうえで重要な要素となったという (90)。

作家としてのディケンズにとって大切な読者とは、19世紀当時のどのような人々であったのだろうか。*Oliver Twist* はディケンズ自身が編集長を務める月刊雑誌 *Bentley's Miscellany* に1837年1月の第2号から20回に分けて掲載された作品である。当時の雑誌の値段は1シリングと読者に手の届きやすい価格となっていた。それまで小説というと三巻本にして出版することが定番であり、値段は31シリング6ペンスと上流階級の者にしか購入できないものであった。また購入はできなくとも、年会費を支払って利用する貸本屋が存在し、主な利用者は中産階級であったと英文学者の清水一嘉は述べている (72)。このような状況でディケンズが1シリングで月刊分冊という形にしたことについて、英文学者の青木健は中産階級の読者にアピールする形態であったと指摘する。三巻本には手が出なかった中産階級の読者も1シリングであれば彼らの娯楽に割くことができたであろうと青木は述べている (2001: 111)。下層階級の者が購入できたのは1シリングで売られた月刊分冊よりもさらに廉価で購入できる読み物であり、当時1ペニーで売られていた『ペニー・マガジン』といった雑誌があった。このようにディケンズの対象となる読者は1ペニーで売られている雑誌を購入する下層階級ではなく、1シリングの月刊分冊を購入する中産階級なのである。

また月刊分冊は読者の購買意欲を支えることに加え、月に一度出版するという形態に着目すると、この形態は出版した直後の読者の反応をみて話の筋を変えることが可能なのである。ディケンズは書籍の入手方法や作品のテーマ、物語の内容などあらゆることに関して読者との繋がりを優先する作家であると青木は論じている (2008: 146)。このようにディケンズは中産階級の読者との繋がりを重要視したと仮定すれば、主人公オリバーは中産階級を苦しめていたスリ少年になることから免れ、リアルな存在として描かれなくな

ったと解釈できる。

次に本章第二節で示したストーリーの偶発性について、ディケンズの中産階級の視点があったのかについて論じる。第二節ではストーリーが偶発的であるという指摘に対して、ディケンズが孤児への救済を肉親の愛情を受けることに依拠したため、物語後半では偶然の出来事が増えたのであると分析した。肉親の愛情を受けることができたオリバーは、フェイギンのいるスリ集団の中でスリをして生計を立てる子供ではなく、もはや大人たちに守られる子供に変化していった。つまり肉親の愛情を受けるオリバーは、スリ集団の中で自立して生活するような大人と子供の狭間に置かれていた状況から脱し、愛情を受けることができる真の子供になったのである。子供という特定の概念はフランス革命や産業革命といった革命時代の成果として現れたとし、それによって肉体的な面において劣っていることとは別に、子供が大人と区別されるようになったと松村は述べている（1989: 48）。まさしくディケンズが *Oliver Twist* を執筆した時代は子供という概念がつけられた時代であった。ディケンズは *Oliver Twist* の序文において、オリバーがあらゆる悪環境の中で生き延び、最後に善が勝利することを示そうと意図したと述べている（松村 1989: 55）。序文にある通り、物語の中で救貧院やスリ集団との生活など様々な危険がオリバーに迫るが、最後まで無傷で生き抜くことができる。このような点においてオリバー自身に「純真無垢」な子供の姿が表現されている。

またイギリスの代表的なロマン派詩人であるウィリアム・ワーズワスも自身の作品においてロンドンの喧騒的な劇場の中で一人座らされているあどけない子供を描いている。ワーズワスの子供のイメージはディケンズと共通しており、どちらも悪環境の中でも純粋さを失わない子供であると松村は指摘している（1989: 56-57）。このような2人の作家の子供像には大人に守られるべき清純な子供としての解釈が含まれている。当時中産階級の家族にとって子供というのは愛されるべき存在であり、それは多くの面から理解することができる。以前働き手として扱われていた子供は学校に通うようになり、また子供の教育ゲームやおもちゃなど子供向け商品の商業化が進んだとイギリスの歴史学者のローレンス・ストーンは述べている。またストーンは子供の教育に関心を寄せることや子供向けの商品の商業化に表れるように、子ども中心の情愛的子育てとして中産階級の家族観を論じている（333-339）。物語後半のブラウンローやローズのオリバーに対する扱いを考えると、オリバー中心に彼らの行動が決定しているように思われ、ストーンの子ども中心の子育て論と共通している。以上のことから、物語前半に提示した孤児への救済方法として物語後半で肉親の愛情に依拠したことは、中産階級の家族観を理想としたディケンズが中産階級の視点からこの作品を描いたのではないかと考えられる。

これまで2つの観点からディケンズの中産階級の視点の有無について論じてきた。下層階級に寄り添った作家として一般的に解釈されるディケンズになぜこのような中産階級の視点がみられるのだろうか。再び彼の生い立ちについて着目し、執筆における態度について考察する。彼は中産階級の家庭に生まれたが、少年時代に父が負債者監獄に入れられた

ためディケンズは働きに出なければならず、彼は学校に通わずに靴墨工場で週 6 日働いていた。彼には靴墨工場によく仕事を教え親切にしてくれる仲間のボブ・フェイギンがいたのである。そんな彼をディケンズは快く思う半面で、靴墨工場で働くような人間とは違うという誇りをディケンズは捨てきれなかったと英文学者の早尾葉子は論じている (7)。*Oliver Twist* においてオリバーにゲーム感覚でスリを教え、後に犯罪者であることが明らかとなり、処刑されてしまうのがユダヤ人のフェイギンである。登場人物の 1 人の名前に幼少期の頃、親切にしてくれたボブ・フェイギンの名前を借りている。これに関して、親切にしてくれた仲間さえも作品の悪人の名前として借りたくなるほど、工場で労働させられた少年時代はディケンズにとって精神的痛手であると早尾は述べている (8)。このように自身が中産階級であるという意識はディケンズにとって誇りであった一方、下層階級に落ちぶれた苦悩の少年時代は逃れたい過去であったと言える。さらに本論の第 1 章第 3 節では、娼婦更正施設の運営を通してディケンズに下層階級へ配慮する態度がみられる一方、下層階級に中産階級のスタンダードを教えるような姿勢があると論じた。ディケンズは自らの経験から慈善活動や作品を通し下層階級に手を差し伸べていたことは確かであるが、そのような活動には常にディケンズの中産階級としての誇りや固執が付きまとっていたのではないかと考えられ、執筆に影響しているといえる。

本節では、ディケンズの中産階級の視点の有無について *Oliver Twist* に対する批判的な評価を基に考察した。主人公の行動が能動的から受動的に行動が変化していく理由として、読者の存在を意識するディケンズの意図を読み取ることができた。当時の雑誌の値段から読者層は中産階級が多く、中産階級の読者の期待や願望を意識しながらディケンズは執筆していたと考えられる。このことからディケンズの考えの中に中産階級の視点の存在を見出すことができた。また本章第 2 節で示したストーリーの偶発性に関しては、孤児への救済の解決策を肉親の愛情に求めたことで、物語後半に偶発的な出来事が増えたのではないかと推察した。これに関して肉親の愛情を受けられる、中産階級の子供像を描いているのではないかと考えられ、当時の子供に愛情を注ぐ中産階級の家族像と共通点が見られたためディケンズに中産階級の視点があると結論づけることができた。さらに彼の生い立ちを再度着目することで、作品以外の観点からディケンズの中産階級の視点を確認することができた。中産階級の生活から落ちぶれ、学校に通えず靴墨工場で労働させられたという精神的痛手が執筆時にまで影響し、作り上げられたことが明らかとなった。幼少期の経験から、慈善活動においても下層階級に寄り添う一方、自ら中産階級である誇りを持ち続けていたといえる。

本論文を通して、ディケンズの生い立ちや作品の執筆背景、また作品を下層階級の視点で描かれたもの、そして中産階級の視点で描かれたものとして考察した。*Oliver Twist* 執筆の背景には新救貧法に苦しむ貧民が存在し、作品を通してディケンズは悲惨な生活をイギリス国民に知らしめ、また役人や新救貧法で定められた制度を諷刺した。物語最後には主人公が幸せな暮らしを得るといった下層階級の人々にとって希望に満ち溢れる作品として

描かれている。この点からディケンズは下層階級の視点をもって作品を執筆したといえる。しかし一部の研究者が指摘するように作品には欠陥部分があり、それらを分析するとディケンズは中産階級を意識し描いているといえることが多く発見できた。さらに彼の生涯から、彼の中産階級への固執や誇りを確認することができた。以上を踏まえると、本論文ではディケンズは中産階級の視点をもって *Oliver Twist* を描いたと結論づけることができる。

終章

世界で最も有名とされる小説家の1人であるチャールズ・ディケンズの作品の中で、現在でも映画やミュージカルを通して国民に愛される作品が *Oliver Twist* である。この作品は1834年の新救貧法を題材とし、救貧院での悲惨な生活や役人の非人道性などを批判している。このようにディケンズの特徴として下層階級の視点を持って社会諷刺し、下層階級の生活をリアルに描くことが挙げられる。しかし本論文では、ディケンズは下層階級の視点を持って作品を描いているという一般的な解釈を懐疑的に考察し、ディケンズには中産階級を意識するような視点があるのではないかと仮定し、彼の生涯や作品を分析し *Oliver Twist* はどちらの視点で描かれているか明らかにした。

第1章では、作者ディケンズの生涯について述べ、彼の特徴として挙げられる下層階級の視点や社会問題をリアルに描く点などがどのように培われたのか、ディケンズとはイギリス社会においてどのような存在であったのかを論じた。ディケンズにはジャーナリスト、小説家、慈善活動家など様々な面があるが、この地位を築くまでに苦悩の幼少期があった。彼は父親の借金により不安定な生活を送り、家計を助けるべく児童労働を行い、学校には通えず満足のいく教育を受けることはできなかった。彼は教育を受けることを諦め、記者の道に進むが、これが彼に好機を与えジャーナリストとしての地位を獲得する。その後物語に興味を持ったディケンズはジャーナリストとして活動する傍ら小説家としても活動の範囲を広げ、名声を得るようになる。彼の下層階級の視点には自らの幼少期の経験に加え、慈善活動家として下層階級に手を差し伸べていたことが影響している。このようにディケンズは苦悩の幼少期を経て、ジャーナリストや小説家、慈善活動家など様々な面を持ち、下層階級の視点を獲得したといえる。

第2章では、*Oliver Twist* において、どのような点にディケンズの下層階級の視点が読み取れるのか、そして下層階級の人々にディケンズはどのような救いの手を差し伸べたのかを論じた。*Oliver Twist* の背景には社会の理不尽な構造によってつくられた新救貧法に苦しめられている貧民が存在し、ディケンズは救貧院での悲惨な生活や役人の非人道的な態度を諷刺し、そうした状況に異議を唱えた。彼の諷刺は下層階級の共感を得るだけでなく、下層階級の人々が実際に生活しているものより過酷な生活をリアルに描くことで下層階級の人々に安心感を与えている。また彼はイギリスの国民にとって馴染みのある成功物語を踏襲することによって物語が好転することを暗示し、最後に主人公が中産階級の養子になることで結末を迎えるように描いている。おとぎ話を踏襲しているが当時の社会問題を如実に描くことによって物語全体にリアリティが生まれ、読者に希望を与えている。これらは自ら貧困に苦しめられた経験をもつディケンズであるからこそ描けるものであり、このような特徴がディケンズの下層階級の視点であると考えられる。

第3章では一部の研究者に批判されている *Oliver Twist* の欠陥部分を提示し、それらを分析することでどのような意図があるのかを考察した。欠陥部分の一つ目は物語前半では能動的な態度をとっていたが後半では受動的になってしまう主人公の変化について、二つ

目は作品の前半と後半のつながりの弱さ、また後半に偶発的なストーリーが増えることについてである。主人公の変化はディケンズが読者の存在を意識してオリバーに同情を寄せられるようにあえてリアルに描かなかったためと推察した。*Oliver Twist*はディケンズが編集長を務める雑誌に連載され、当時の読者は中産階級が多数であった。ディケンズが中産階級の読者との繋がりを重要視したとすると、オリバーは当時中産階級を苦しめていたスリ少年にはならず、中産階級の同情を得られるように描かれたといえる。また2点目の前半と後半のつながりについて、前半部分では救貧院での生活や役人の非人道的な態度などを扱っているにも関わらず、後半ではそれらの改善策が一切見られずにオリバーの出生の秘密へと物語は移行している。孤児であったオリバーは出生の秘密が明らかになり、肉親関係が築かれる。これはディケンズが前半に提示した社会問題に対し、後半では肉親の愛情こそが貧困に苦しめられている孤児への救済方法であると考えたからである。肉親の愛情を受けるためオリバーは純真無垢な子供となり愛されるべき存在となった。それらは当時の中産階級の家族における理想的な子供像と一致しており、ディケンズの中産階級の視点がうかがえる。

以上2つの欠陥部分からディケンズが中産階級の視点からこの作品を執筆したことが明らかになった。*Oliver Twist*における悪役フェイギンは彼が幼少期の頃勤めていた工場で親切にしてくれた仲間の名前である。ディケンズにとって幼少期の記憶は精神的な苦痛を与える忘れない過去なのである。その一方で苦悩の幼少期から抜け出し、小説家やジャーナリストとして名声を得たディケンズは中産階級としての誇りを持ち続けていたといえる。このように彼は下層階級に寄り添いながらも、中産階級の視点で *Oliver Twist* を描いたのである。

Oliver Twist を手に取ったとき、主人公オリバーが救貧院で粥のおかわりを求める場面に同情の気持ちを持たない読者はいないであろう。それほど *Oliver Twist* は下層階級に寄り添った希望のある作品と解釈され、ディケンズの幼少期の経験やジャーナリストとして、小説家としての才能が詰まったものである。しかし、本論文で指摘したように主人公の出生の秘密が明らかになり、中産階級の養子になるという結末は偶然に頼りすぎている。このような批判がある中、多数の中産階級の読者の存在や中産階級の家庭における子供像を表現すること、また貧困状態に成り下がったショックから生まれたディケンズの中産階級への執着を理由に、ディケンズは中産階級の視点を持って本作品を描いたと結論づけることができる。本論文は *Oliver Twist* は下層階級に寄り添った作品であるという従来の解釈に加え、ディケンズは中産階級の視点をもって *Oliver Twist* を描いたという新たな解釈を提示することに本論文の意義がある。

参考文献

- 青木健「ヴィクトリア朝における廉価本争議—新たな読者像をめぐって—」『成城文芸』176号, 2001, 95-132.
- .「十九世紀作家の権利意識(1)—*Sketches by Boz* 出版にからんで—」『成城文芸』204号, 2008, 145-160.
- アンガス・ウィルソン『ディケンズの世界』松村昌家訳, 英宝社, 1979.
- 植木研介『チャールズ・ディケンズ研究—ジャーナリストとして、小説家として—』南雲堂フェニックス, 2004.
- 梅宮創造「ディケンズと公開朗読」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第2分冊, 55号, 2009, 3-18.
- 小泉純一「文学と福祉の接点: ディケンズが『オリバー・ツイスト』に託したもの」『日本福祉大学社会福祉論集』120号, 2000, 75-91.
- 西條隆雄「「新救貧法」(1834)と*Oliver Twist*」『同志社大学英語英文学研究』42号, 1987, 1-18.
- .『ディケンズの文学—小説と社会—』英宝社, 1998.
- 清水一嘉『イギリス近代出版の諸相—コーヒーハウスから書評まで—』世界思想社, 1999.
- ローレンス・ストーン『家族・性・結婚の社会史』北本正章訳, 勁草書房, 1991.
- 武井暁子「慈善活動家としてのディケンズ—ユーレイニア・コテージへの評価—」『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』30号, 2007, 183-200.
- チャールズ・ディケンズ『オリヴァー・トゥイスト』上・下, 小池滋訳, 筑摩書房, 1990.
- クレア・トマリン『チャールズ・ディケンズ伝』高儀進訳, 理想社, 2014.
- 早尾葉子「悪党達の世界—*Oliver Twist*に関する一考察—」『英米研究』文教大学女子短期大学, 22号, 1987, 1-16.
- 松村昌家「*Oliver Twist*におけるコントラストとアイロニー」英文学研究, 56巻, 1979, 37-47.
- .『ディケンズの小説とその時代』研究社出版, 1989.
- 三ツ星堅三『チャールズ・ディケンズ—生涯と作品—』創元社, 1995.
- 矢野聡「一八三四年イギリス新救貧法再考」『政経研究』第49巻, 日本大学, 2013, 797-819.
- 山崎真由美『『オリヴァー・トゥイスト』に於けるディケンズの魔的な筆力』『跡見英文学』2号, 跡見学園女子大学, 63-76.
- 吉田一穂「*Oliver Twist*と救貧院」『Poiesis』32号, 関西大学, 2007, 1-15.
- .『ディケンズの小説: 社会・救済・浄化』英宝社, 2014.
- Chin, Sei. “Is *Oliver Twist* a Newgate Novel? — On the Feature and Reason of Charles Dickens’s Depiction of Crime —.” 『歴史文化社会論講座紀要』9号, 京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化社会論講座, 2012, 63-75.
- Dickens, Charles. *Oliver Twist*. Oxford: Oxford UP, 2000.

- Enomoto, Hiroshi. "On the Brink of Righteousness and Respectability: Criminal and Law in Dickens' *Oliver Twist*." 『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』 45号, 2013, 47-66.
- Miyata, Masanori. "Type of Linguistic Deviation in *Oliver Twist*" 「四国女子大学紀要」 1 卷, 1 号, 1981, 1-21.
- Richardson, Rush. *Dickens & the Workhouse*. Oxford: Oxford UP, 2012.
- Tamai, Fumie. "Educating Oliver : The conflicting ideas of Education in *Oliver Twist*." 『ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報』 33 号, 2010, 4-18.